

# Oracle® Enterprise Performance Management System

## デプロイメント・オプション・ガイド



リリース 11.2.x

F28848-15

2024 年 1 月

ORACLE®

Copyright © 2013, 2024, Oracle and/or its affiliates.

著者: EPM Information Development Team

This software and related documentation are provided under a license agreement containing restrictions on use and disclosure and are protected by intellectual property laws. Except as expressly permitted in your license agreement or allowed by law, you may not use, copy, reproduce, translate, broadcast, modify, license, transmit, distribute, exhibit, perform, publish, or display any part, in any form, or by any means. Reverse engineering, disassembly, or decompilation of this software, unless required by law for interoperability, is prohibited.

The information contained herein is subject to change without notice and is not warranted to be error-free. If you find any errors, please report them to us in writing.

If this is software, software documentation, data (as defined in the Federal Acquisition Regulation), or related documentation that is delivered to the U.S. Government or anyone licensing it on behalf of the U.S. Government, then the following notice is applicable:

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs) and Oracle computer documentation or other Oracle data delivered to or accessed by U.S. Government end users are "commercial computer software," "commercial computer software documentation," or "limited rights data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, reproduction, duplication, release, display, disclosure, modification, preparation of derivative works, and/or adaptation of i) Oracle programs (including any operating system, integrated software, any programs embedded, installed, or activated on delivered hardware, and modifications of such programs), ii) Oracle computer documentation and/or iii) other Oracle data, is subject to the rights and limitations specified in the license contained in the applicable contract. The terms governing the U.S. Government's use of Oracle cloud services are defined by the applicable contract for such services. No other rights are granted to the U.S. Government.

This software or hardware is developed for general use in a variety of information management applications. It is not developed or intended for use in any inherently dangerous applications, including applications that may create a risk of personal injury. If you use this software or hardware in dangerous applications, then you shall be responsible to take all appropriate fail-safe, backup, redundancy, and other measures to ensure its safe use. Oracle Corporation and its affiliates disclaim any liability for any damages caused by use of this software or hardware in dangerous applications.

Oracle®, Java, MySQL and NetSuite are registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. Other names may be trademarks of their respective owners.

Intel and Intel Inside are trademarks or registered trademarks of Intel Corporation. All SPARC trademarks are used under license and are trademarks or registered trademarks of SPARC International, Inc. AMD, Epyc, and the AMD logo are trademarks or registered trademarks of Advanced Micro Devices. UNIX is a registered trademark of The Open Group.

This software or hardware and documentation may provide access to or information about content, products, and services from third parties. Oracle Corporation and its affiliates are not responsible for and expressly disclaim all warranties of any kind with respect to third-party content, products, and services unless otherwise set forth in an applicable agreement between you and Oracle. Oracle Corporation and its affiliates will not be responsible for any loss, costs, or damages incurred due to your access to or use of third-party content, products, or services, except as set forth in an applicable agreement between you and Oracle.

# 目次

## ドキュメントのアクセシビリティについて

---

## ドキュメントのフィードバック

---

### 1 デプロイメント・オプションについて

---

### 2 EPM System 製品のスケールリング

---

Java Web アプリケーションのクラスタリング	2-1
Financial Management サーバーのクラスタリング	2-3
データ管理のクラスタリング	2-4
Essbase クラスターの構成	2-4

### 3 EPM System 製品の Oracle Web Services Manager の構成

---

Oracle Web Services Manager の手動でのデプロイ	3-1
Oracle Web Services Manager の構成	3-3
サービス・リクエストに対する Oracle Web Services Policy Manager の有効化	3-4
メッセージ保護のキーストアの設定	3-4
OID、MSAD、SunOne への WebLogic ドメインの構成	3-5
Financial Close Management および Tax Governance の構成オプション	3-7

### 4 デプロイメントの変更

---

ポートの変更	4-1
データベース・パスワードの変更	4-1
ユーティリティを使用した Planning パスワードの変更	4-3
RCU パスワードの変更	4-4
Oracle Platform Security Services のスキーマ・パスワードの変更	4-5

<b>5</b>	<b>Shared Services レジストリの更新</b>	
	Shared Services レジストリのコンポーネント階層の理解	5-1
	Shared Services レジストリの編集	5-1
<b>6</b>	<b>Enterprise Manager を使用した EPM System Java Web アプリケーションのモニター</b>	
<b>7</b>	<b>EPM System のアンインストール</b>	
	EPM System 製品のアンインストール	7-1
	EPM System クライアントのアンインストール	7-3
	Smart View の拡張機能の削除	7-4
<b>8</b>	<b>カスタム構成の実行</b>	
	ヒープ・サイズの変更によるパフォーマンスの最適化	8-1
	Essbase 構成のカスタマイズ	8-3
<b>9</b>	<b>障害リカバリ</b>	
	障害リカバリについての一般情報	9-1
	障害リカバリのアーキテクチャ	9-2
	EPM System コンポーネントの障害リカバリ	9-2
	ファイル・システムおよびデータベースの複製を使用しない障害リカバリ	9-4
	追加情報	9-5

# ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

## Oracle サポートへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

# ドキュメントのフィードバック

このドキュメントに対するフィードバックを送るには、Oracle Help Center トピックのページの下部にあるフィードバック・ボタンをクリックします。  
epmdoc\_ww@oracle.com に電子メールを送信することもできます。

# 1

## デプロイメント・オプションについて

このガイドでは、追加のデプロイメント・オプションの手順を説明します。このガイドの手順は、Oracle Enterprise Performance Management System 製品の初期インストールおよび構成を完了してからのみ使用します。

Oracle® Technology Network の [Oracle Documentation Library \(http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html\)](http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html) でこのガイドの更新版がないかどうかを確認してください。

## 2

# EPM System 製品のスケールリング

ほとんどの Oracle Enterprise Performance Management System コンポーネントで、シングル・ポイント障害をアーキテクチャから除去したり、ロード・バランシングにより一定のパフォーマンスを維持する(あるいはその両方の)ために、アクティブ-アクティブ構成でのクラスタリングがサポートされています。

Oracle Hyperion Foundation Services をホストしているマシン以外に Java Web アプリケーションをデプロイする際は、WebLogic Server 管理サーバーが Foundation Services ホスト・マシン上で実行中である必要があります。Foundation Services と同じマシン上にデプロイする場合、WebLogic Server 管理サーバーは実行中である必要はありません。

## Java Web アプリケーションのクラスタリング

この項では、WebLogic の管理とクラスタリングが理解されていることを前提としています。これらのタスクを熟知していない場合は、Oracle Enterprise Performance Management System Java Web アプリケーションをクラスタリングする前に、技術援助を求めてください。

### 前提条件

#### ノート:

この項の情報は、クラスタに含まれる各ノードに Java Web アプリケーションがインストール済みであることを想定しています。

EPM System Java Web アプリケーション用にクラスタを設定する前に、次のタスクを完了します:

- Oracle Hyperion Foundation Services をスケールリングするときは、デプロイメントの各マシンで、RCU を使用して新しいスキーマを作成し、RCUSchema.properties を編集する必要があります。詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System インストールガイド* および *構成ガイド* のリポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャのスキーマの作成と RCU スキーマ・プロパティの更新を参照してください。
- Foundation Services をホストしているマシン以外に Java Web アプリケーションをデプロイする際は、WebLogic Server 管理サーバーが Foundation Services ホスト・マシン上で実行中である必要があります。Foundation Services と同じマシン上にデプロイする場合、WebLogic Server 管理サーバーは実行中である必要はありません。
- ロード・バランサ上で、セッションの永続または固定セッション(特定セッションに関するすべての要求を同じサーバーに送信するセッション)のいずれかを使用可能にする必要があります。
- 分散システムで(Oracle Hyperion Profitability and Cost Management とは異なるサーバーに Oracle Essbase がインストールされる場所では)、Profitability and Cost Management サーバーに Oracle Hyperion Provider Services をインストールして構成する必要もあり

ます。これは、Essbase 接続で「埋込み」モードの使用が構成でサポートされている場合でも必須です。クラスタリングされた環境で(複数の Profitability and Cost Management 管理サーバーがインストールされている場所)、Provider Services を各 Profitability and Cost Management 管理サーバー・ノードにインストールして構成する必要もあります。

- クラスタに含める各ノードに EPM System 製品をインストールします。各マシンの同じファイル・システムの場所にインストールします。クラスタ内の各物理マシンで同じファイル・システム・パスを使用することが重要です。これにより、クラスタ内の各ノードに対して環境変数を設定してカスタマイズするのではなく、クラスタ全体でこれらの環境設定を一度設定するだけで済みます:

すべての OS - CLASSPATH および PATH

### EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリング

EPM System コンフィグレータを使用した構成時に EPM System Java Web アプリケーションをクラスタリングできます。次の一般構成順序を使用します。この手順は、EPM System インストーラによってインストールされる Oracle HTTP Server が論理ホストであることが前提です。

#### ノート:

クラスタリングされている環境で Profitability and Cost Management がスケールアップされる場合は、Profitability エンタープライズ・アプリケーション内の各モジュールが、Profitability クラスタ内のすべてのサーバーにターゲット設定される必要があります。

EPM System コンフィグレータを使用した構成時に EPM System Java Web アプリケーションをクラスタリングするには:

1. 環境内のマシンごとに EPM System Java Web アプリケーションをインストールします。
2. EPM System コンフィグレータの「タスクの選択」ページで「**アプリケーション・サーバーへのデプロイ**」を選択し、最初のマシンで Java Web アプリケーションを構成します。

デプロイメント中、EPM System コンフィグレータにより、WebLogic の管理対象サーバーごとにクラスタが作成されます。

3. EPM System コンフィグレータの「タスクの選択」ページで「**アプリケーション・サーバーへのデプロイ**」を選択し、2 番目のマシンで Java Web アプリケーションを構成します。

デプロイメント中、EPM System コンフィグレータにより、WebLogic のクラスタにサーバーが追加されます。

デプロイメント内のすべての追加マシンに対して、このステップを繰り返します。

4. EPM System コンフィグレータの「タスクの選択」ページで Foundation タスクから「**Web サーバーの構成**」を選択し、最後に Web サーバーを構成します。その後、Web サーバーと Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace を再起動します。

Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する考慮事項:

- EPM System コンフィグレータにより、管理対象サーバーごとにクラスタが構成されます。
- EPM System 製品ごとに使用するクラスタは 1 つのみにする必要があります。EPM System コンフィグレータにより、管理対象サーバーごとに 1 つのクラスタが作成されます。

#### 単一の管理対象サーバーのスケール・アウト

後続のマシンの単一の管理対象サーバーをスケール・アウトするには:

1. EPM System インストーラを使用して、環境内の追加マシンに同じセットの Java Web アプリケーションをインストールします。スケール・アウトする場合、Java Web アプリケーションを追加または削除できません。
2. スケール・アウトする各マシンから EPM System コンフィグレータを実行します。
3. Hyperion Foundation の「タスクの選択」パネルで、「このマシンでの単一の管理対象サーバーのスケール・アウト」を選択します。

「このマシンでの単一の管理対象サーバーのスケール・アウト」オプションは、次に当てはまる場合にのみ選択できます:

- WebLogic 管理サーバーが現在のマシンにインストールされていません。
  - 単一の管理対象サーバーが WebLogic 管理サーバーにデプロイされています。
  - 単一の管理対象サーバーがマシンでまだスケール・アウトされていません。
4. 「次へ」をクリックしてサーバーをスケール・アウトします。

Foundation Services をスケールリングするときは、デプロイメントの各マシンで、RCU を使用して新しいスキーマを作成し、RCUSchema.properties を編集する必要があります。詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System インストレーションおよび構成ガイド* のリポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャのスキーマの作成と RCU スキーマ・プロパティの更新を参照してください。

## Financial Management サーバーのクラスタリング

次の手順は、サーバーを Oracle Hyperion Financial Management 環境に追加し、クラスタを定義し、サーバーをクラスタに追加するための推奨プロセスの概要です。

サーバーを Financial Management 環境でクラスタリングするには:

1. Financial Management を 1 つ以上の新規サーバーにインストールした後、EPM System コンフィグレータをすべての新規サーバーで実行し、「サーバーの構成」タスクおよび「データベースの構成」タスクを選択します。
2. EPM System コンフィグレータをいずれか 1 つのアプリケーション・サーバーに対して実行し、「アプリケーション・クラスタの構成」タスクを選択して、クラスタの定義とサーバーに対するクラスタの追加または削除を行います。
3. Oracle Hyperion Foundation Services Java Web アプリケーションおよび Web サーバーを再起動します。
4. Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace で、優先するクラスタに対して各アプリケーションを登録します。

## データ管理のクラスタリング

この項では、EPM System コンフィギュレータの外部にあるデータ管理製品コンポーネントのクラスタリングについて説明します。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition のクラスタリングの詳細は、[EPM System コンフィギュレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリング](#)を参照してください。

### Data Relationship Management クラスタ

Oracle Data Relationship Management Web アプリケーションを、Oracle HTTP Server またはサードパーティ製ロード・バランサのいずれかとクラスタ化できます。Oracle HTTP Server とのクラスタリングの手順は、*Oracle Data Relationship Management インストール・ガイド*の Data Relationship Management Web アプリケーションのロード・バランシングの構成を参照してください。

クラスタリングされたデータベース環境に Data Relationship Management がインストールされている場合は、データベースを作成する際に Data Relationship Management 構成コンソールのリポジトリ・ウィザードで**データベース管理者の実行スクリプトを生成**を選択できます。2つのスクリプトが生成されます: 1つはスキーマ所有者やデータベースを作成するもので、もう一方はデータベース・スキーマ・オブジェクトを作成するためのものです。Data Relationship Management リポジトリをクラスタ化する手順については、使用するデータベース・ソフトウェアのドキュメントを参照してください。

Data Relationship Management サーバーはクラスタ化できません。

## Essbase クラスタの構成

この項では、Oracle Essbase サーバーのアクティブ-アクティブ・クラスタリングについて説明します。Oracle Essbase Administration Services Java Web アプリケーションおよび Oracle Hyperion Provider Services Java Web アプリケーションのクラスタリングの詳細は、[EPM System コンフィギュレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリング](#)を参照してください。

アクティブ-パッシブ・クラスタリング(Windows): [フェイルオーバー・クラスタでの Essbase サーバーの構成](#)を参照してください。

アクティブ-パッシブ・クラスタリング(Linux): [フェイルオーバー・クラスタでの Essbase サーバーの構成](#)を参照してください。

アクティブ-パッシブ・クラスタリング:

- EPM リリース 11.2.15 以降、Essbase で OPMN ベースのクラスタリング・サポートが使用されなくなりました。Essbase 21c では、Microsoft Cluster Service 統合がサポートされていません。Essbase アクティブ-パッシブ・クラスタの設定の詳細は、[フェイルオーバー・クラスタでの Essbase サーバーの構成](#)を参照してください。Essbase に新しいアクティブ-パッシブ・クラスタを設定する場合は、Essbase のインストールおよび構成を、最初のノードでのみ実行する必要があります。Essbase は、EPM 構成ツールを使用して構成しないでください。かわりに、EPM 11.2.15 インストーラを使用して Essbase をインストールする必要があります。

- 既存のアクティブ-パッシブ Essbase クラスタをアップグレードするとき、Essbase は、マスター・ノードでのみアップグレードする必要があります。セカンダリ・ノードでは、Essbase を手動でアンインストールしてから、11.2.15 EPM インストーラを使用して再インストールする必要があります。

 ノート:

Essbase は、セカンダリ・ノードで EPM 構成ツールを使用して構成しないでください。リリース 11.2.15 以降、Essbase は、アクティブ-パッシブ・クラスタで2つよりも多いノードを含むことができます。クラスタへの追加のノードの追加の詳細は、[フェイルオーバー・クラスタでの Essbase サーバーの構成](#)を参照してください。

アクティブ-アクティブ・クラスタリング: Provider Services を使用して、アクティブ-アクティブ Essbase クラスタを構成できます。アクティブ-アクティブ Essbase クラスタは、高可用性とロード・バランシングをサポートします。アクティブ-アクティブ Essbase クラスタは、データベース上の読取り専用操作をサポートしており、レポート作成目的にのみ使用してください。アクティブ-アクティブ Essbase クラスタは、データのライトバックまたはアウトラインの変更をサポートせず、1つのデータベースの変更内容をクラスタ内のすべてのデータベースに対して同期化するなどのデータベースの複製タスクを管理しないため、Oracle Hyperion Planning をサポートしていません。Planning が Essbase をデータ・ソースとしてクラスタ・モードで使用するように構成されている場合、Oracle Hyperion Calculation Manager をルール・エンジンとしてビジネス・ルールを起動する機能はサポートされません。[アクティブ-アクティブ \(読取り専用\) Essbase クラスタの構成](#)を参照してください。

表 2-1 Essbase サーバーのクラスタリングの構成

機能	アクティブ-パッシブ (Windows)	アクティブ-パッシブ (Linux)	アクティブ-アクティブ
ライトバック	はい	はい	いいえ
フェイルオーバー	はい	はい	はい
ロード・バランシング	いいえ	いいえ	はい
高可用性	はい	はい	はい

 ノート:

- EPM リリース 11.2.15 以降、Microsoft Cluster Service はサポートされなくなりました。
- 詳細は、[アクティブ-アクティブ \(読取り専用\) Essbase クラスタの構成](#)を参照してください。

次の表に、Essbase のインストール、構成および管理のプロセスの概要を示します。

表 2-2 Essbase のインストール、構成および管理

タスク	リファレンス
Essbase を含む Oracle Enterprise Performance Management System 製品をインストールします。各ノードに Essbase をローカルにインストールします。	<i>Oracle Enterprise Performance Management System</i> インストールおよび構成ガイドの EPM System 製品のインストール

 ノート:

Oracle Hyperion Shared Services レジストリ・データベースを Essbase とは異なるマシンに置くことをお勧めします。

Essbase を含む EPM System 製品を構成します。

Essbase クラスタリング(アクティブ-パッシブのみ)を実装する場合、EPM System コンフィグレータでの構成時に次のようにします:

1. 最初のマシンで EPM System コンフィグレータを使用してクラスタを設定します:
  - 「**Essbase サーバーの構成**」 ページで「**アプリケーションの場所へのフル・パス(ARBORPATH)**」に指定する場所は共有ドライブにする必要があります。この場所は、クラスタのすべての Essbase サーバーによってアクセス可能なファイル・システム上である必要があります。
  - 「**Essbase クラスタ名**」にはクラスタの名前を指定します。
2. フェイルオーバー・クラスタでの [Essbase サーバーの構成](#) を参照してください

*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールおよび構成ガイドの EPM System 製品の構成

### アクティブ-アクティブ Essbase クラスタの構成

Provider Services を使用すると、ある Essbase サーバー内のデータベースとまったく同じデータベースのアクティブ-アクティブ・クラスタを、同じコンピュータ上の複数の Essbase サーバー、またはネットワーク上の複数のコンピュータに分散されている Essbase サーバーに作成できます。

 ノート:

Essbase サーバーの使用が、ライセンスの制約を受ける場合があります。

Provider Services クライアントには、Oracle Smart View for Office クライアント、カスタム Java アプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)クライアント、XML for Analysis (XMLA)クライアントが含まれます。Provider Services は、クラスタに属するデータベース・インスタンスにクライアント要求を分散します。アクティブ-アクティブ Essbase クラスタは、データベース上の読取り専用操作をサポートします。データのライトバックやアウトラインの変更はサポートしていません。アクティブ-アクティブ Essbase クラスタは、1つのデータベースの変更をクラスタ内のすべてのデータベースに対して同期化するなどのデータベースの複製機能を管理しません。

### Provider Services でのアクティブ-アクティブ・クラスタの構成

[アクティブ-アクティブ\(読取り専用\) Essbase クラスタの構成](#)を参照してください

### アクティブ-アクティブ Essbase クラスタへのサーバーの追加

[アクティブ-アクティブ\(読取り専用\) Essbase クラスタの構成](#)を参照してください。

### アクティブ-アクティブ Essbase のクラスタリングの例

わかりやすくするために、この項のすべての例で Smart View を使用しています。

### Essbase サービス・クラスタ

Provider Services を使用すると、同じデータベースでアプリケーションを実行している Essbase サーバーをグループ化して、それらを 1つのリソースとして使用できます。

 ノート:

Essbase サーバーをクラスタに追加または削除する場合は、サーバーを再起動してグループへの変更を反映させます。グループ内のコンポーネントは、サーバーを再起動せずに使用可能/使用不可を切り替えることができます。

### Essbase データベース・クラスタ

Essbase データベースをクラスタリングすると、負荷分散とフェイルオーバーをサポートできるようになります。Provider Services は並列クラスタリングを提供します。これは、ユーザーの要求に応答する、一連のアクティブな重複データベースです。ユーザーからは、どのデータベースにアクセスしているかは見えません。ユーザーは単一のデータ・ソースに接続して、そのソースからデータを取得します。Provider Services を使用すると、可用性および優先ルールに基づいた、クラスタ内のデータベース間での接続のルーティングが容易になります。

図 2-1 Provider Services での Essbase データベースのクラスタリング

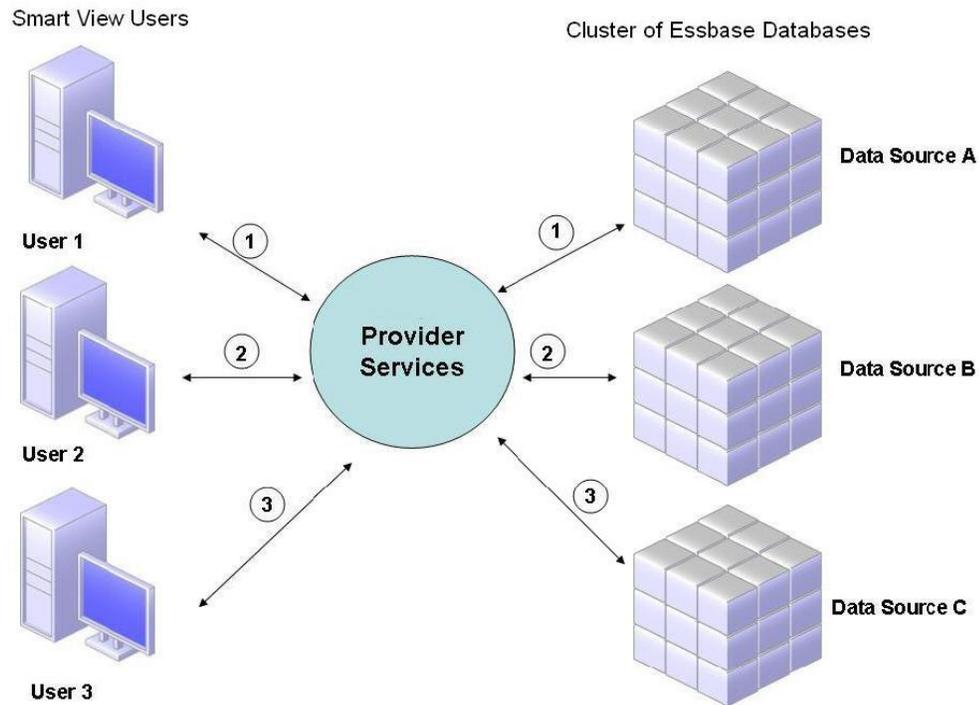


図 1 では、Smart View ユーザーは、Provider Services を介して Essbase に接続します。

各ユーザー接続は、Essbase のセッション中にサーバーに割り当てられます。Provider Services はセッション・レベルでロード・バランシングを行います。たとえば、図 1 では、ユーザー 1 の接続はデータ・ソース A にマップされます。ユーザー 2 の接続はデータ・ソース B にマップされます。ユーザー 3 の接続はデータ・ソース C にマップされます。つまりユーザー 1 からのすべての要求は、接続中はデータ・ソース A で処理されます。

データ・ソース A が失敗した場合:

- ユーザー 1 はデータ・ソース A でタイムアウトします。
- ユーザー 1 は、次に使用可能なデータ・ソース(図 2 のデータ・ソース C)に再ルーティングされます。

図 2 は、データ・ソース A がオフラインになったときの処理を示しています。

図 2-2 1つのデータ・ソースがオフラインになったデータベース・クラスター

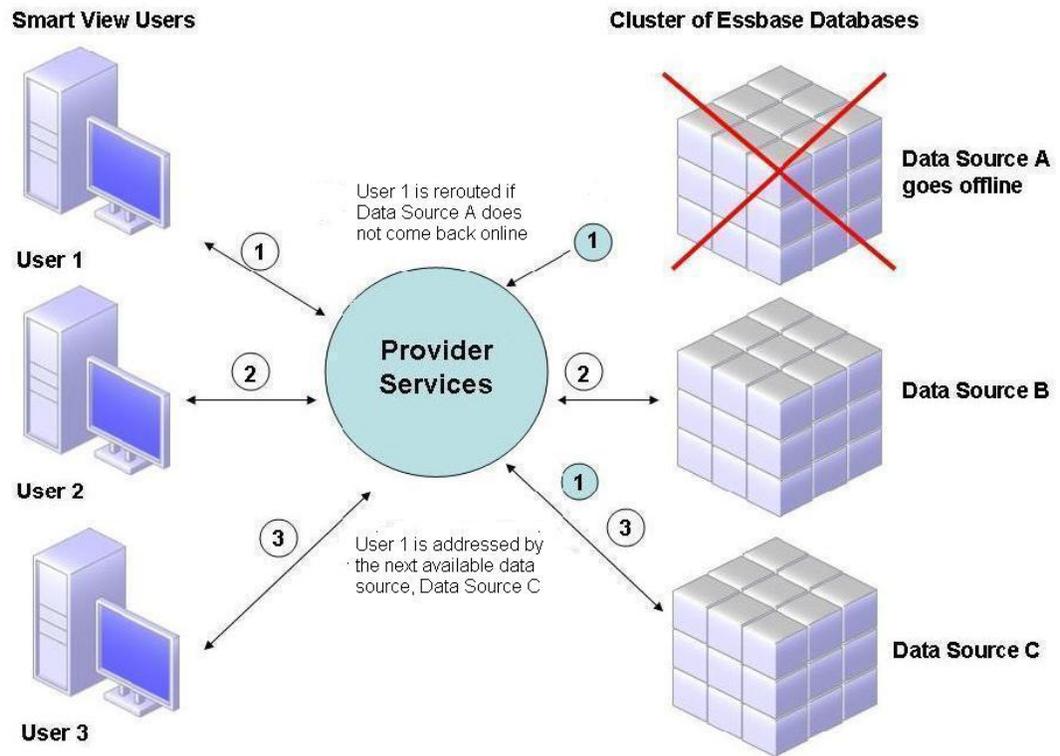


図 2 では、問合せ 1 の状態は中間層で保守されて、再ルーティングされます。Provider Services にも、サーバー間のロード・バランシング機能があります。

図 3 は、1 つのサーバーにデプロイされた、クラスタリングされたデータベースを示しています。

図 2-3 単一サーバー上の Essbase データベース・クラスター

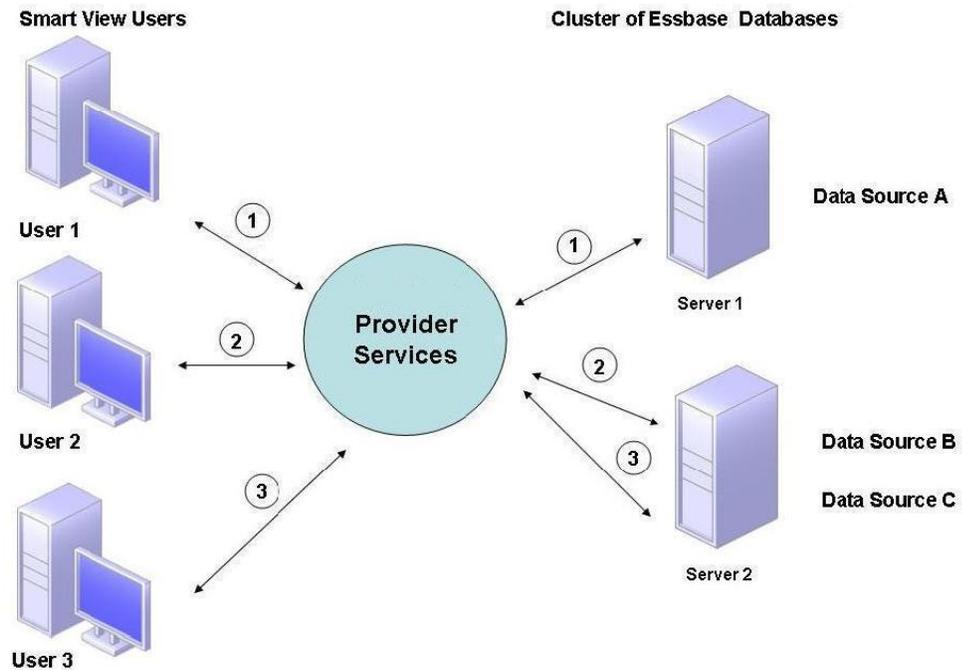
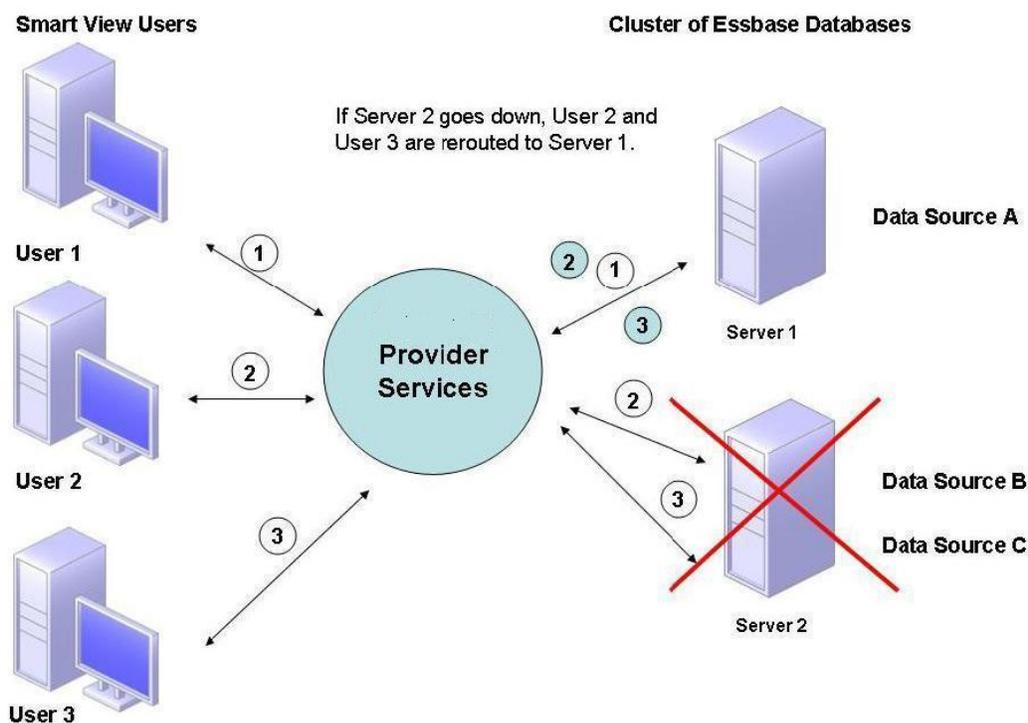


図 3 では、2つのサーバーに Essbase データベースが含まれます。サーバー 1 には 4つのプロセッサがあり、RAM は 8GB です。サーバー 2 には 8つのプロセッサがあり、RAM は 16GB です。サーバー 2 のリソースのほうが多いため、サーバー 2 にデータ・ソース B と C が置かれます。このため、サーバー 2 は両方の接続を処理できます。

フェイルオーバーのサポートも、単一サーバー上のデータベース・クラスターに適用されます。図 4 では、サーバー 2 がオフラインになります。ユーザー 2 とユーザー 3 は、次に使用可能なサーバーであるサーバー 1 に再ルーティングされます。

図 2-4 単一サーバー上のデータベース・クラスタのフェイルオーバー



### Essbase クラスタへの接続

Essbase クライアントとサーバーは、次のフォーマットの URL から Essbase クラスタに接続できます:

```
http(s)://host:port/essbase/agent?ClusterName=clusterName
```

また、クラスタ名のみを使用しても Essbase クラスタに接続できますが、構成ファイルを変更して URL のクラスタ名を解決する Provider Services サーバーを指定することにより、まずこれを有効にする必要があります。

これらのファイルを更新した後、Essbase を再起動します。

Oracle Hyperion Financial Reporting を使用して Provider Services アクティブ-アクティブ Essbase クラスタに接続するには、Financial Reporting を 3 層モード用に構成する必要があります。

Financial Reporting を 3 層モード用に構成するには:

1. MIDDLEWARE\_HOME/EPMSysstem11R1/products/financialreporting/bin/FRConfig.cmd を起動します。
2. 「MBean」タブを選択して、**com.hyperion/Financial Reporting/Attributes/EssbaseJAPIServer** を参照します。
3. **EssbaseJAPIServer** が Provider Services サーバーとして設定されていることを確認します。

4. 「属性値」の「値」ボックスの「サーバー名」として Provider Services クラスタ名を入力して、「リフレッシュ」をクリックします。
5. Financial Reporting を終了して再起動します。

# 3

## EPM System 製品の Oracle Web Services Manager の構成

Oracle Web Services Manager を、Oracle Hyperion Financial Management、Oracle Hyperion Tax Provision、Oracle Hyperion Provider Services または Oracle Data Relationship Management とともに使用する場合は、次の手順を順番に実行します:

### ノート:

これらのステップは、Oracle Enterprise Performance Management System をインストールして構成した後で実行する必要があります。Oracle Web Services Manager (OWSM)は Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace とともに自動的にインストールされますが、デプロイも構成もされません。これらのステップを実行する前に、EPM System インストーラを使用してリポジトリ作成ユーティリティをインストールしたことを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System インストールガイドおよび構成ガイドのリポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャ・スキーマの作成を参照してください。

- Oracle Web Services Manager (OWSM)を手動でデプロイします。
- Oracle Web Services Manager (OWSM)を構成します。
- メッセージ保護のキーストアを設定します。
- サービス・リクエストに対して Oracle Web Services Policy Manager を設定します。
- WebLogic ドメインを構成して、Oracle Internet Directory、Microsoft Active Directory (MSAD)または SunOne に接続します。

これらのステップを実行した後、管理対象サーバーを再起動します。

## Oracle Web Services Manager の手動でのデプロイ

Oracle Web Services Manager (OWSM)は Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace とともに自動的にインストールされますが、デプロイも構成もされません。このステップを実行する前に、EPM System インストーラを使用してリポジトリ作成ユーティリティをインストールしたことを確認します。Oracle Enterprise Performance Management System インストールガイドおよび構成ガイドのリポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャ・スキーマの作成を参照してください。

OWSM を手動でデプロイするには:

1. Weblogic Server  
(\Oracle\Middleware\user\_projects\domains\EPMSys\bin\startWeblo

gic.cmd)を起動して、WebLogic 管理コンソール(<http://hostname:port/console>)にログインします。

2. **mds-owsm** データソースを作成します:
  - a. **ロックして編集**をクリックします。
  - b. 「**ドメイン構造**」で「**データ・ソース**」をクリックして、「**構成**」タブで「**新規**」をクリックします。
  - c. 「**新規**」リストから、「**汎用データ・ソース**」を選択します。
  - d. JDBC データ・ソースのプロパティを入力して、「**次**」をクリックします。
    - **名前**—mds-owsm
    - **スコープ**—グローバル
    - **JNDI 名**—jdbc/mds/owsm
    - **データベース・タイプ**—Oracle
  - e. 「**データベース・ドライバ**」ではデフォルトの JDBC データ・ソースのプロパティを維持して、「**次**」をクリックします。
  - f. 接続のプロパティを定義して、「**次**」をクリックします。
    - **データベース名**
    - **ホスト名**
    - **ポート**
    - **データベース・ユーザー名**—*SchemaPrefix\_MDS*。ここで、*SchemaPrefix* は *RCUSchema.properties* で指定された接頭辞です。
    - **パスワード**—*RCUSchema.properties* で指定された *rcuSchemaPassword*。
  - g. 「**ターゲット**」タブで、このデータ・ソースをデプロイするこれらのクラスタを選択して、「**保存**」をクリックします。
    - **管理サーバー**
    - **FoundationServices**—クラスタのすべてのサーバー
    - **HFMWeb**—クラスタのすべてのサーバー
    - **TaxManagement**—クラスタのすべてのサーバー
  - h. 「**構成の解放**」をクリックします。
3. **owsm-pm.ear** をデプロイします:
  - a. **ロックして編集**をクリックします。
  - b. 「**ドメイン構造**」で、「**デプロイメント**」をクリックします。
  - c. 「**構成**」タブで「**インストール**」をクリックします。
  - d. 「**パス**」に  
 \Oracle\Middleware\oracle\_common\modules\oracle.wsm.pm を入力します。
  - e. **wsm-pm.ear** を選択し、「**次**」をクリックします。

- f. 「このデプロイメントをアプリケーションとしてインストールする」を選択し、「次へ」をクリックします。
  - g. デプロイメント・ターゲットを選択し、「次」をクリックします。
    - 管理サーバー
    - FoundationServices—クラスタのすべてのサーバー
    - HFMWeb—クラスタのすべてのサーバー
    - TaxManagement—クラスタのすべてのサーバー
  - h. 「オプション設定」ではデフォルトの選択内容を維持して、「次」をクリックします。
  - i. 選択内容を確認して、「終了」をクリックします。
  - j. 「保存」をクリックします。
  - k. 「デプロイメント」に移動して、「準備完了」状態である **wsm-pm** をクリックします。
  - l. 「制御」タブをクリックします。
  - m. **wsm-pm** を選択します。
  - n. 「開始」をクリックして、「すべてのリクエストを処理」を選択します。
  - o. 「保存」をクリックします。
  - p. 「構成の解放」をクリックします。
4. `EPM_ORACLE_INSTANCE/bin` の `start.bat` を使用して、Oracle Enterprise Performance Management System サービスを起動します。

## Oracle Web Services Manager の構成

Oracle Web Services Manager は Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace とともに自動的にインストールされますが、構成はされません。

Web サービスを使用するには、事前に OWSM を構成する必要があります。このステップを実行する前に、EPM System インストーラを使用してリポジトリ作成ユーティリティをインストールしたことを確認します。*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールシヨンおよび構成ガイドのリポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャ・スキーマの作成を参照してください。

OWSM を構成するには:

1. WebLogic Administration Services マシンで、「すべてのプログラム」、「Oracle WebLogic」、「WebLogic Server」、「ツール」、「構成ウィザード」の順に選択します。
2. 「ようこそ」ページで、「既存の WebLogic ドメインの拡張」を選択して、既存の EPM ドメインに新規のコンポーネントを追加し、構成設定を変更します。
3. 「次」をクリックします。
4. ドメイン構成タイプの更新ページで、「既存のドメインの更新」を選択して、「ドメインの場所」が正しいことを確認し、「次へ」をクリックします。たとえば、`C:\Oracle\Middleware\user_projects\domain\EPMSys` です。
5. 「テンプレート」タブで、Oracle WSM ポリシー・マネージャと「Oracle JRF」が選択されていることを確認し、「次へ」をクリックします。

6. 「**JDBC データ・ソースの構成**」 ページで、RCU の構成時に入力したパスワードを指定し、必要に応じて JDBC データ・ソースの詳細を変更して、「**次へ**」をクリックします。
7. 「**データ・ソースのテスト**」 ページから、テストするデータ・ソースを選択し、「**接続のテスト**」をクリックします。  
正常に接続されると、「**ステータス**」の下にチェック・マークが表示されます。正常に接続されていない場合は、戻って JDBC データ・ソースの詳細を修正してから、テストを再実行します。
8. 「**次**」をクリックします。
9. **コンポーネントのデータソース構成** タブで、「**OWSM MDS**」スキーマを選択して、「**OWSM\_mds**」スキーマの詳細を入力し、「**次へ**」をクリックします。
10. 「**JDBC テスト**」タブで、テストするコンポーネント・スキーマを選択して、「**選択された接続のテスト**」をクリックします。  
正常に接続されると、チェック・マークが表示されて、「**接続結果ログ**」に結果が表示されます。正常に接続されていない場合は、戻って JDBC データ・ソースの詳細を修正してから、テストを再実行します。
11. 残りのページで「**次**」をクリックします。
12. サーバー・マシンを再起動し、すべての Oracle Enterprise Performance Management System サービスを停止して WebLogic 管理サーバー・コンソールを起動します。

## サービス・リクエストに対する Oracle Web Services Policy Manager の有効化

サービス・リクエストに対して Oracle Web Services Policy Manager を設定するには:

1. WebLogic 管理者の資格証明を使用して、WebLogic 管理コンソール([http://WebLogic\\_Admin\\_Host:WebLogic\\_Admin\\_Port/console](http://WebLogic_Admin_Host:WebLogic_Admin_Port/console))にログインします。
2. 「**サーバー**」、「**FoundationServices0**」、「**デプロイメント**」、「**wsm-pm**」、「**制御**」の順に移動します。
3. 「**起動と停止**」で「**wsm-pm**」を選択し、「**起動 - すべてのリクエストを処理**」を選択して「**はい**」を選択します。

## メッセージ保護のキーストアの設定

### ノート:

この手順は、Oracle Hyperion Financial Close Management および Tax Governance では不要です。

メッセージ保護のキーストアを設定するには:

1. まず、keytool コマンドを使用してキーストアを作成します。

Oracle Enterprise Performance Management System ドメインをホストする WebLogic 管理サーバーが稼働しているサーバーの /Oracle/Middleware/  
user\_projects/\$DOMAIN\_HOME/config/fmwconfig に移動し、次のコマンドを実行します:

```
keytool -genkeypair -keyalg RSA -alias aliasName -keypass password -  
keystore keystoreName.jks -storepass password -validity 3600
```

#### ノート:

keytool コマンドが認識されない場合、*Path* 環境変数に JDK が含まれていない可能性があります。次のコマンドを使用して、JDK を *Path* 変数に追加します:  
set PATH=%PATH%;C:\Oracle\Middleware\JDK1.8.0\_181\bin\;.;

2. 次に、Web サービスのメッセージ保護を設定します:
  - a. WebLogic 管理者資格証明を使用して、Enterprise Manager にログインします (<http://WebLogicAdminServerHost:7001/em>)。
  - b. 「WebLogic ドメイン」を展開して、EPMSystem (または EPM System デプロイメントに使用するドメイン名)を選択します。
  - c. EPMSystem を右クリックして、「セキュリティ」を選択し、「セキュリティ・プロバイダ構成」を選択します。
  - d. 「キーストア」セクションにスクロールし、セクションを展開して、「構成」をクリックします。
  - e. 「キーストア・パス」で、./EPMKeystore.jks などの作成したキーストアのパスおよび名前を入力します。
  - f. キーストアの作成時に使用したキーストア・パスワードを入力して確認します。
  - g. キーストアの作成時に使用した別名およびパスワードを使用して、「署名鍵」および「暗号化鍵」の別名およびパスワードを入力します。パスワードを確認して、「OK」をクリックします。署名および暗号化キー用の別名およびパスワードは、キーの保管および取得に使用される文字列の別名およびパスワードを定義します。
3. 変更を有効にするため、Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Control をログアウトして再起動し、EPM System 管理対象サーバーを再起動します。

## OID、MSAD、SunOne への WebLogic ドメインの構成

この手順は、WebLogic ドメインを構成するため、あるいは Oracle Hyperion Financial Close Management または Oracle Hyperion Tax Governance の場合に、OID、MSAD、SunOne などの外部プロバイダと通信するために必要です。この外部プロバイダと連携するよう Oracle Hyperion Shared Services を構成する必要もあります。使用するプロバイダに該当する項に従ってください。

 **ノート:**

Financial Close Management および Tax Governance では Shared Services ネイティブ・ディレクトリはサポートしていません。Oracle Hyperion Profitability and Cost Management、Oracle Hyperion Provider Services、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition および Oracle Hyperion Financial Management の Web サービス機能は、Shared Services ネイティブ・ディレクトリで動作しません。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

OID、MSAD または SunOne を WebLogic Server に接続するには:

1. WebLogic 管理コンソールにまだログインしていない場合は、ログインします。
2. 左側の「**セキュリティ・レルム**」をクリックし、「**myrealm**」をクリックして「**プロバイダ**」タブをクリックします。
3. 「**追加**」をクリックして次の詳細を入力し、「**OK**」をクリックします。

OID の場合:

- 名前 - **OID**
- タイプ - **OracleIntenetDirectoryAuthenticator**

MSAD の場合:

- 名前 - **MSAD**
- タイプ - **ActiveDirectoryAuthenticator**

SunOne の場合:

名前 - **SunOne**

サーバーの再起動を促すメッセージは無視して問題ありません。この手順の最後に再起動します。

4. 先ほど追加したプロバイダをクリックします。「**プロバイダ固有**」タブをクリックして、プロバイダの次の詳細を入力し、「**保存**」をクリックします。
  - ホスト
  - ポート
  - プリンシパル
  - 資格証明
  - ユーザー・ベース DN
  - グループ・ベース DN
  - 名前指定によるユーザー・フィルタ(MSAD のみ)
  - ユーザー名属性(MSAD のみ)

残りはデフォルト値のままかまいません。

5. 「**OID**」、「**MSAD**」または「**SunOne**」をクリックし、「**制御フラグ**」に「**SUFFICIENT**」を選択します。

6. WebLogic Server を再起動します。

 **ノート:**

Shared Services で外部プロバイダを構成する際は、SSO が機能するように、このプロバイダを信頼できるソースに指定します。

 **ノート:**

ドメイン構成の更新の詳細は、[ドメイン構成の更新](#)を参照してください。

## Financial Close Management および Tax Governance の構成オプション

### OAM 用の Financial Close Management または Tax Governance の構成

シングル・サインオンに Microsoft SQL Server または Oracle Database と OAM を使用している場合は、次の手順を実行します:

1. WebLogic 管理者の資格証明を使用して、WebLogic 管理コンソール([http://WebLogic\\_Admin\\_Host:WebLogic\\_Admin\\_Port/console](http://WebLogic_Admin_Host:WebLogic_Admin_Port/console))にログインします。
2. 「ドメイン構造」ポートレットで、「**セキュリティ・レルム**」をクリックします。
3. 使用可能なレルムから、「**デフォルト・レルム**」ステータスが「True」のレルム名をクリックします。

 **ヒント:**

チェック・ボックスではなく、レルム名をクリックします。

4. 「**プロバイダ**」タブを選択し、構成されているすべての認証/アサーション・プロバイダを表示します。
5. 「認証プロバイダ」で、「**新規**」をクリックします。
6. サポートされている認証/アサーション・プロバイダのリストから「**OAMIdentityAsserter**」を選択します。「**新しい認証プロバイダの作成**」パネルで **OAMIdentityAsserter** などのプロバイダの名前を指定し、「**OK**」をクリックします。  
これで、構成されているプロバイダのリストに **OAMIdentityAsserter** が表示されます。
7. プロバイダを次の順序で並べ替えます:
  - MSAD、OID または SunOne (使用しているプロバイダによって異なる)
  - OAM IdentityAsserter
  - デフォルトの認証者
  - デフォルトの IdentityAsserter

# 4

## デプロイメントの変更

EPM System コンフィグレータを使用すると、製品を再構成し、環境に変更を組み込むことができます。

再構成するには、製品をホストしているコンピュータ上で EPM System コンフィグレータを起動し、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストレーションおよび構成ガイドの EPM System 製品の構成の手順に従います。

## ポートの変更

ほとんどの Oracle Enterprise Performance Management System コンポーネントでは、EPM System コンフィグレータを使用してポートを変更します。詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストレーションおよび構成ガイドのポートの付録を参照してください。

再構成してポートまたはサーバーを変更する場合は、Web サーバー(EPM System コンフィグレータの Oracle Hyperion Foundation Services タスクの下)も再構成する必要があります。

## データベース・パスワードの変更

データベース・リポジトリが必要な Oracle Enterprise Performance Management System 製品の場合、データベース・パスワードを、たとえば会社のパスワード変更ポリシーに準拠するように変更する際は、EPM System コンポーネントが新規パスワードを使用してデータベースに接続できるように Oracle Hyperion Shared Services レジストリを更新する必要があります。

### 仮定と前提条件

- *Oracle Enterprise Performance Management System* 標準デプロイメント・ガイドまたは *Oracle Enterprise Performance Management System* インストレーションおよび構成ガイドを使用して、EPM System 製品をインストールおよび構成しました。
- データベースのバックアップを作成しました。
- データベース管理コンソールを使用して、Shared Services レジストリまたは製品リポジトリ・データベースの構成に使用されたユーザー・アカウントのパスワードを変更しました。
- 単一マシンのデプロイメント、または Oracle Hyperion Foundation Services マシンから EPM System コンフィグレータを実行する分散デプロイメントでは、WebLogic 管理サーバーを停止する必要があります。
- 分散環境で、Foundation Services マシン以外のマシンから EPM System コンフィグレータを実行する際は、WebLogic 管理サーバーが実行中である必要があります。

### Shared Services レジストリ・データベース・パスワードの変更

Shared Services レジストリ・データベースのデータベース・パスワードを更新するには:

1. EPM System Java Web アプリケーション、サービスおよびプロセスを停止します。
2. Oracle Hyperion Shared Services をホスティングするマシンで、`EPM_ORACLE_INSTANCE/bin` に変更して `configtool.bat|.sh` を起動します。
3. 「Shared Services およびレジストリ・データベース構成」 ページで、「**前に構成された Shared Services データベースに接続**」を選択し、新しいデータベース・パスワードを入力します。
4. 「タスクの選択」 ページで、他の製品が Shared Services データベースを使用する場合は、その製品に対する「**データベースの構成**」タスクを選択します。
5. 「データベース構成」 ページで他の製品を選択した場合は、新しいデータベース・パスワードを入力します。
6. **テーブルを削除して再作成するか、既存のデータベースを再使用するか**を選択するメッセージが表示されたら、「**既存のデータベースを再使用します**」を選択します。
7. 構成を続行し、完了したら「**終了**」をクリックします。
8. WebLogic 管理サーバー(停止している場合)、Java Web アプリケーション、サービスおよびプロセスを再起動します。
9. 分散環境で作業している場合は、デプロイメント内の各マシンで Shared Services レジストリ・データベースを構成するステップを繰り返します。

#### EPM System コンポーネントのリポジトリ・データベース・パスワードの変更

Shared Services 以外の EPM System コンポーネントのデータベース・パスワードを変更するには:

1. EPM System Java Web アプリケーション、サービスおよびプロセスを停止します。
2. データベース・パスワードが変更されたコンポーネントをホスティングするマシンから、`EPM_ORACLE_INSTANCE/bin` に変更して `configtool.bat|.sh` を起動します。
3. 「タスクの選択」 ページで、データベース・パスワードが変更されたこのインスタンス内のすべての製品に対して「**データベースの構成**」を選択します。

#### ノート:

- Oracle Hyperion Financial Management データベース・スキーマのパスワードを変更する場合、「**データベースの構成**」タスクに加えて「**アプリケーション・サーバーへのデプロイ**」タスクも選択する必要があります。
- Financial Management サーバーがデータベース接続に SSL を使用するように構成されている場合、HFM の「**データベースの構成**」タスクを実行した後に、**SSL データベース接続を使用するための HFM サーバーの構成**にリストされている手順に従って再度 EPM レジストリを更新する必要があります。レジストリ・レポートまたは EPM デプロイメント・レポートのいずれかをレビューして、`ODBC_TRUSTSTORE` ファイルの場所を確認できます。

4. 新しいパスワードを入力します。

5. テーブルを削除して再作成するか、既存のデータベースを再使用するかを選択するメッセージが表示されたら、「既存のデータベースを再使用します」を選択します。
6. 構成を続行し、完了したら「終了」をクリックします。
7. WebLogic 管理サーバー(停止している場合)、データベース、Java Web アプリケーション、サービスおよびプロセスを再起動します。

#### Data Relationship Management リポジトリ・パスワードの変更

アプリケーションの Oracle Data Relationship Management リポジトリ・パスワードを変更するには:

1. Data Relationship Management を停止します。
2. データベースでパスワードを変更します。
3. Data Relationship Management コンソールを開きます。
4. 「構成」に移動します。
5. 矢印コントロールを使用して適切なアプリケーションを選択します。
6. 「リポジトリ構成」で、新しいパスワードを入力します。
7. 新パスワードをテストするには、「接続のテスト」をクリックします。  
「接続が完了しました。」というメッセージが表示されます。
8. 「構成の保存」をクリックして、暗号化された形式で新しいパスワードを構成ファイルにコミットします。
9. アプリケーションまたは Data Relationship Management サービスを再起動します。

#### データベース・パスワードの変更の検証

データベースの構成の変更を検証するには:

1. 次のいずれかの方法を使用して、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Diagnostics を起動します:
  - (Windows) /bin で、validate.bat をダブルクリックします。
  - 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「instanceName」、「EPM System 診断」の順に選択します。
  - (Linux)コンソールから、/bin に移動して、validate.sh と入力します。  
コマンド・ウィンドウに進行状況が表示されます。
2. 結果を表示するには、/diagnostics/reports に移動して、validation\_report\_date\_time.html を開きます。

## ユーティリティを使用した Planning パスワードの変更

SetDBNEssbasePassword と呼ばれる Oracle Hyperion Planning ユーティリティを使用すると、指定するアプリケーションのリストに対してデータベースおよび Oracle Essbase のパスワードを設定できます。アプリケーション名は、スペースなしで引用符に囲まれたカンマ区切りリストとして指定する必要があります。

コマンド・ラインで次の構文を使用し、ユーティリティを起動します:

```
SetDBNEssbasePassword /U:<username> /A:"<スペースなしで引用符に囲まれたカンマ区切りリストのアプリケーション名>"
```

SetDBNEssbasePassword.cmd では、次の引数を使用します:

- /U:admin
- /A:"スペースなしのカンマ区切りのアプリケーション名"

ユーティリティが起動されると:

1. ユーザーのログイン・パスワードを要求されます。
2. データベース・パスワードの入力を要求されます。これは、設定が必要な新しい DB パスワードです
3. Essbase パスワードの入力を要求されます。これは、設定が必要な新しい Essbase パスワードです。

次に、アプリケーション・パスワードのリセットが完了したことが確認されます:

app ApplicationName のデータベースおよび Essbase のパスワードのリセットが成功しました。

無効なアプリケーションが指定されたり、カンマ区切りリストにスペースを含むアプリケーション名が指定された場合、新しいパスワードは要求されますが、失敗して次のメッセージが表示されます:

```
app ApplicationName のアプリケーション入力が見つかりません。スキップします...
```

ユーティリティを実行した後、パスワード変更を有効にするには **Planning** を再起動する必要があります。

## RCU パスワードの変更

RCU コンポーネントのスキーマ・パスワードを変更するには、データベースでパスワードを変更します。

たとえば、スキーマ **VBC\_STB** のパスワードを変更するには:

1. 次のサービスを停止します:
  - Oracle Enterprise Performance Management System サービス
  - ノード・マネージャ Windows サービスおよび Oracle HTTP Server (Oracle HTTP Server を Web サーバーとして使用している場合)
  - WebLogic 管理サーバー
2. SQL\*Plus を使用してデータベースに接続します。SYSDBA 権限を持つユーザーとして接続します。
3. 手順に従って、Oracle Platform Security Services のスキーマ・パスワードを変更します。[Oracle Platform Security Services のスキーマ・パスワードの変更](#)を参照してください。

4. 次のコマンドを発行します:

```
SQL> ALTER USER schema IDENTIFIED BY new_password;
COMMIT;
```

たとえば、VBC\_STB パスワードを abc123 に変更するには次のようにします。ここで VBC は、トピック [RCU スキーマ・プロパティの更新](#) で言及されている環境での最初の Foundation サーバー構成で使用される RCU (リポジトリ作成ユーティリティ) の接頭辞の単なる一例です:

```
SQL> ALTER USER VBC_STB IDENTIFIED BY abc123;
COMMIT;
```

SQL Server の場合、次のコマンドを発行します:

```
ALTER LOGIN user WITH PASSWORD = new_password;
```

 **Note:**

すべての RCU コンポーネントは、同じパスワードを使用して更新する必要があります。  
(RCU コンポーネントに対して変更するスキーマ: VBC\_IAU、VBC\_IAU\_APPEND、VBC\_IAU\_VIEWER、VBC\_MDS、VBC\_OPSS、VBC\_STB、VBC\_UMS、VBC\_WLS、VBC\_WLS\_RUNTIME)

## Oracle Platform Security Services のスキーマ・パスワードの変更

Oracle Platform Security Services のスキーマ・パスワードを変更するには:

1. SQL\*Plus を使用してデータベースに接続します。SYSDBA 権限を持つユーザーとして接続します。
2. 次のコマンドを発行します:

```
SQL> ALTER USER schema IDENTIFIED BY new_password;
COMMIT;
```

ステップ 3 に進む前に、必ずコミット・コマンドを発行してください。

SQL Server の場合、次のコマンドを発行します:

```
ALTER LOGIN user WITH PASSWORD = new_password;
```

3. WLST コマンド `modifyBootStrapCredential` を実行して、JPS 構成ファイルを更新します。

- a. 次のディレクトリから **WLST** を起動します:

```
ORACLE_HOME/oracle_common/common/bin/wlst.sh
```

- b. `modifyBootStrapCredentials` コマンドで **JPS** 構成ファイルへのフル・パスを指定します。例:

```
modifyBootStrapCredential (jpsConfigFile='C:/Oracle/Middleware/  
user_projects/domains/EPMSysstem/config/fmwconfig/jps-  
config.xml',username='VBC_OPSS',password='password1')
```

この時点で管理サーバーを開始できますが、ログ・ファイルには例外が表示されます。

- c. リポジトリ・スキーマ・パスワードを変更する場合は、**WebLogic** コンソールまたは **Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Control** を使用して、対応するリポジトリ・データ・ソースのパスワードを変更する必要があります。**WebLogic** 管理者資格証明を使用して、**Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Control** にログインします(例: <http://WebLogicAdminServerHost:7001/em>)。
- i. **WebLogic** ドメイン・メニューから **JDBC データ・ソース** を選択します。
  - ii. 次の5つの各データ・ソースを編集し、パスワードを更新します:
    - i. `LocalSvcTblDataSource`
    - ii. `opss-audit-DBDS`
    - iii. `opss-audit-viewDS`
    - iv. `opss-data-source`
    - v. `WLSSchemaDataSource`
  - iii. 「**JDBC データ・ソース**」の名前を選択します:
    - i. 「**構成**」タブをクリックし、次に**接続プール**・タブをクリックします。
    - ii. 「**パスワード**」に新規パスワードを入力し、確認します。
    - iii. 「データベース接続のテスト」を選択して更新を確認します。
    - iv. 「**保存**」をクリックします。
    - v. 5つのデータ・ソースをすべて更新します。
    - vi. **変更のアクティブ化**を選択します。
    - vii. **WebLogic** 管理サーバーを再起動します。
    - viii. **EPM** サービスを起動します。

# 5

## Shared Services レジストリの更新

Oracle Hyperion Shared Services レジストリは、コマンド・ライン・ユーティリティを使用して編集できます。このユーティリティを使用するのは、EPM System コンフィグレータを使用して Shared Services レジストリに必要な変更を実行できない場合のみにしてください。

### ヒント:

ほとんどの変更は、EPM System コンフィグレータを使用して実行できます。たとえば、デプロイされている Java Web アプリケーションを変更する場合、EPM System コンフィグレータの「Web アプリケーションの論理アドレスの構成」タスクを選択すると、Java Web アプリケーションを再デプロイしなくても変更を実行できます。Oracle Enterprise Performance Management System インストール手順および構成ガイドを参照してください。

epmsys\_registry.bat ユーティリティ (Linux では epmsys\_registry.sh) を使用して、Shared Services レジストリに対して必要な変更を行います。

## Shared Services レジストリのコンポーネント階層の理解

Oracle Hyperion Shared Services レジストリを修正するには、その構造を理解する必要があります。11.1.x 製品の構成時に、EPM System コンフィグレータは、各製品のコンポーネントを使用して Shared Services レジストリを自動的に更新します。コンポーネントには、階層を形成する子コンポーネントも含まれます。階層の各コンポーネントには、独自のコンポーネント・プロパティがあります。Shared Services レジストリを更新するには、コンポーネント名とコンポーネント・プロパティ名を両方とも認識しておく必要があります。

たとえば、ESSBASE\_PRODUCT コンポーネントには、次のコンポーネント・プロパティが含まれます:

- *host*
- *agent\_PortNumber*

コンポーネントのプロパティ名および子コンポーネントを調べるには、コマンドを使用して Shared Services レジストリ内のコンポーネントを表示します。[Shared Services レジストリ内のコンポーネントの表示](#)を参照してください。

## Shared Services レジストリの編集

Oracle Hyperion Shared Services レジストリを編集するには:

1. Shared Services レジストリをバックアップします。

2. 11.1.x の Oracle Enterprise Performance Management System ソフトウェアをホストしているマシンで、/bin に移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry view componentType
```

コンポーネント階層を表示して、コンポーネントの削除またはコンポーネント・プロパティの更新に必要なコンポーネント・プロパティ名を確認する必要があります。

詳細は、[Shared Services レジストリ内のコンポーネントの表示](#)を参照してください。

3. 必要な変更に応じて、次のコマンドを参照してください:

コンポーネントを削除するには、[コンポーネント・インスタンスの削除](#)を参照してください。

コンポーネント・プロパティを更新するには、[コンポーネント・プロパティの更新](#)を参照してください。

#### ノート:

Linux で epmsys\_registry コマンドを実行する場合は、すべての # の前に \ を付ける必要があります。

4. 任意の製品の LOGICAL\_WEB\_APP プロパティを変更した場合、EPM System コンフィグレータを実行し、Web サーバーを再構成します。(「タスクの選択」ページで、Oracle Hyperion Foundation Services Web サーバー構成タスクを選択します。)

### Shared Services レジストリ内のコンポーネントの表示

コンポーネントを削除したりコンポーネント・プロパティを更新する前に、コンポーネント階層を表示し、コンポーネント・プロパティの名前と値を取得する必要があります。

コンポーネント階層を表示するには:

1. /bin に移動し、次のコマンドを使用します:

```
epmsys_registry view componentType
```

*componentType* は、Shared Services レジストリ内のコンポーネントの名前です。

このコマンドは、指定された階層内のすべてのコンポーネントと、その直属の子のみを表示します。情報はコンソールに表示されます。

たとえば、PLANNING\_PRODUCT 階層内のコンポーネントをすべて表示するには、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry view SYSTEM9/PLANNING_PRODUCT
```

2. 必要に応じて、コマンドを繰り返してサブコンポーネントのプロパティ名を取得します。

たとえば、LOGICAL\_WEB\_APP は、PLANNING\_PRODUCT の子です。Oracle Hyperion Planning の LOGICAL\_WEB\_APP のプロパティを表示するには、次のコマンドを入力します：

```
epmsys_registry view SYSTEM9/PLANNING_PRODUCT/LOGICAL_WEB_APP
```

3. この表示で、削除または更新するコンポーネントに関する次の情報を書き留めます：

- 削除または更新するコンポーネントのコンポーネント ID
- 更新するコンポーネントのコンポーネント・プロパティの名前と値

たとえば、Planning の LOGICAL\_WEB\_APP には、*context*、*port* および *host* を含む様々なプロパティがあります。

### コンポーネント・インスタンスの削除

コンポーネント・インスタンスを削除するには、コンポーネント階層に表示されるコンポーネントの ID を確認します。

コンポーネントをコンポーネント階層から削除するには、/bin に移動し、次のコマンドを実行します：

```
epmsys_registry deletecomponent #componentID
```

ここで、*componentID* は、コンポーネント階層に表示されるコンポーネントの ID です。

Linux では、次を実行します：

```
epmsys_registry.sh deletecomponent \#componentID
```

ノードを削除しても、ノードの子は削除されません。

#### ヒント:

製品ノードを削除する場合は、ノードの子をすべて削除してから製品ノードを削除してください。

#### 注意:

正しいコンポーネントを削除してください。

### コンポーネント・プロパティの更新

コンポーネント・プロパティを更新するには、コンポーネント階層に表示されるコンポーネント ID とコンポーネント・プロパティ名を確認します。

コンポーネント・プロパティを更新するには、/bin に移動し、次のコマンドを実行します：

```
epmsys_registry updateproperty #componentID/@componentProperty value
```

ここで、`componentID` はコンポーネント階層に表示されるコンポーネントの ID、`componentProperty` は更新するコンポーネント・プロパティ名、`value` はコンポーネント・プロパティの新しい値です。

Linux では、次を実行します:

```
epmsys_registry.sh updateproperty \#componentID/@componentProperty
value
```

コンポーネント・プロパティ名は大文字と小文字が区別されます。

#### ヒント:

コンポーネント階層を表示するとき、「プロパティ」セクションでコンポーネント・プロパティ名を探してください。また、プロパティ名 `host` を使用すると、コンポーネントが実行されているホストを更新できます。

たとえば、コンポーネント ID が `99999` の Oracle Essbase サーバーのポート番号を `1425` に変更するには、次のコマンドを入力します:

```
epmsys_registry updateproperty #99999/@agent_PortNumber 1425
```

### Shared Services レジストリ内のホスト・エントリの表示

Shared Services レジストリのホスト・エントリを表示できます。

様々な目的でこのコマンドを使用できます。たとえば、次の目的でコマンドを使用します:

- 再ホスティング・プロセスの単純化
- サーバー名を別名に変更するプロセスの単純化
- サーバー通信の問題のデバッグ

Shared Services レジストリのホスト・エントリを表示するには、`/bin` に移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry viewhosts
```

Shared Services Registry に格納されているこのマシンのサーバー名が 1 つの列に表示され、別の列に DNS で解決されたホスト名が表示されます。

#### ヒント:

列の名前が一致しない場合、DNS エントリを解決するか、解決した名前と一致するホスト・ファイルを作成します。

# 6

## Enterprise Manager を使用した EPM System Java Web アプリケーションのモニター

EPM System コンフィグレータでは、最初の Java Web アプリケーションをデプロイする際に、Oracle Enterprise Manager が自動的にデプロイされます。

Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Control を使用して、WebLogic ドメインを管理できます。組み込みの Enterprise Manager を使用すると、EPM System のすべての Java Web アプリケーションをすぐに管理できます。Grid Control を使用するフル・バージョンの Enterprise Manager では、Fusion Middleware Control に機能(メトリックの履歴情報を含む)を追加します。

- サーバーおよび実行中の Java Web アプリケーションのステータス
- Java Web アプリケーションを実行しているサーバーおよびリスニングしているポート
- Java Web アプリケーションおよび管理対象サーバーの状況およびパフォーマンス(モニターするサーバーを選択し、WebLogic サーバー、パフォーマンス・サマリーの順に移動して、メトリックの使用可能なカテゴリを表示します)

Enterprise Manager を起動するには、`http://WebLogicAdminServerHost:port/em` に移動します。

# 7

## EPM System のアンインストール

Oracle Enterprise Performance Management System 製品のこのリリースをアンインストールするには、次のワークフローに従います。

1. バイナリを削除するには、EPM System アンインストーラを使用します。 [EPM System 製品のアンインストール](#) また、EPM System コンポーネントをサイレント・アンインストールできます。
2. EPM System クライアントをアンインストールします。 [EPM System クライアントのアンインストール](#) を参照してください。
3. 他の製品にミドルウェア・ホームの残りのコンテンツを使用していない場合は、「プログラムの追加/削除」を使用して Oracle HTTP Server、WebLogic Server、oracle\_common および Oracle Database クライアントのアンインストーラを実行するか、製品のアンインストール・ショートカットを使用します。

## EPM System 製品のアンインストール

Oracle Enterprise Performance Management System 製品をアンインストールすると、EPM System アンインストーラは、インストール場所からバイナリを除去します。デプロイメント内のどのインスタンスでも今後使用されないコンポーネントを完全に削除する場合にアンインストールを使用します。

### ▲ 注意:

EPM System 製品をアンインストールすると、EPM System アンインストーラにより、インストール・ディレクトリからすべて削除されます。アンインストールを実行する前に、保持するファイルは必ずバックアップしておくようにしてください。ファイルのバックアップ方法の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System* バックアップおよびリカバリ・ガイドを参照してください。

EPM System 製品をアンインストールするには:

1. EPM System プロセスが実行されていないことを確認します。
2. アンインストーラを起動するメソッドを選択します:
  - (Windows) `epm_oracle_home/uninstall` 内の `uninstall.cmd` をダブルクリックします。
  - (Windows) Windows のコントロール・パネルで、削除/アンインストールする「**Oracle EPM System**」を選択します。
  - (Windows) Windows コンソールから、`epm_oracle_home/uninstall/` に移動し、`uninstall.cmd` と入力します。

- 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「EPM System のアンインストール」の順に選択します。
  - (Linux) /uninstall ディレクトリに移動し、./uninstall.sh と入力します。
  - (Linux) /uninstall ディレクトリに移動し、./uninstall.sh -console と入力します。
3. 続行する前にその他のプログラムを終了してから、「次へ」をクリックまたは選択します。
  4. アンインストールする製品を選択して、「次へ」をクリックまたは選択します。選択した製品の同じ層上のすべてのコンポーネントがアンインストールされます。  
たとえば、任意の Oracle Hyperion Financial Management Web コンポーネントをアンインストールする場合、EPM System アンインストーラはすべての Financial Management Web コンポーネントをアンインストールします。  
デフォルトでは、インストールされているすべての製品が選択されています。「すべて選択解除」を選択し、全製品に対する選択をクリアしてから、アンインストールする製品のみ選択します。
  5. EPM Oracle ホーム・ディレクトリ内のすべてのファイルとディレクトリを削除するかどうかを指定します。  
このオプションを選択すると、データ・ファイルやカスタマイズしたファイルも削除されます。
  6. アンインストールする製品を確認した後、「次へ」をクリックまたは選択します。  
EPM System アンインストーラにより、各アセンブリのアンインストールが完了するたびに進行状況の表示が更新されます。

#### ノート:

アンインストールを取り消すには、「取消し」をクリックまたは選択します。「取消し」を選択すると、EPM System アンインストーラは、現在のアセンブリのアンインストールを停止し、そのアセンブリをインストール済の状態にロール・バックします。すでにアンインストールされたアセンブリのアンインストールは元に戻せません。

- EPM System アンインストーラにより、アンインストールが成功したかどうかが表示されます。アンインストールが部分的に失敗した場合、EPM System アンインストーラは、アンインストールできなかったアセンブリを指摘します。エラーの詳細はログ・ファイルを確認してください。ログ・ファイルは、`epm_oracle_instance/diagnostics/logs/install` にあります。アセンブリごとに `product-install.log` というログ・ファイルがあります。たとえば、`hss-install.log` などです。
7. 「終了」をクリックまたは選択し、EPM System アンインストーラを閉じます。
  8. Windows で、Oracle HTTP Server をアンインストールした場合、再起動してインストールを完全に削除する必要があります。このステップは、再インストールする場合に必須です。
  9. EPM System 製品のアンインストール後、再起動します。  
クライアントをアンインストールする際、マシンにインストールされているすべての EPM System クライアントを削除する場合にのみ、「設定タイプ」ウィンドウで共通コ

**コンポーネントの削除**を選択します。複数の EPM System クライアントが同一マシンにインストールされていて、1つのクライアントのみを削除する場合、**共通コンポーネントの削除**を選択解除します。

### 製品のサイレント・アンインストールの実行

サイレント・アンインストールを使用すると、プロセスが自動化され、各コンピュータ上でアンインストール設定を手動で指定しなくても複数のコンピュータ上の EPM System 製品をアンインストールできるようになります。

同じアンインストール・オプションを使用して、複数のコンピュータにある EPM System 製品をアンインストールするには、インストール中に応答ファイルを記録します。次に、応答ファイルに保存されているオプションを使用して、コマンド・ラインからサイレント・アンインストールを実行できます。

サイレント・アンインストールを実行するには:

1. インストール時に作成した応答ファイルをアンインストールを実行するマシンにコピーします。また、アンインストールを実行するマシンからアクセスできるネットワーク・ドライブにファイルをコピーすることもできます。

インストール時に応答ファイルを記録する方法の詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System インストレーションおよび構成ガイド*のサイレント・インストールの実行を参照してください。

2. コマンド・ラインから次のコマンドを入力します:

Windows の場合:

```
uninstall.cmd -silent filename
```

Linux の場合:

```
uninstall.sh -silent filename
```

バックグラウンドでアンインストールが実行されます。

## EPM System クライアントのアンインストール

クライアント・インストーラのアンインストール・オプションを使用して、Oracle Enterprise Performance Management System クライアントをアンインストールできます。

EPM System クライアントをアンインストールするには:

1. *client installer folder* でクライアント・インストーラのサブフォルダを開き、クライアント・インストーラのファイル名をダブルクリックします。
2. インストール・ウィザードを進めて、「**削除**」を選択し、アンインストールを完了する場合に「**終了**」をクリックします。

### ノート:

同じマシンにインストールされている複数のクライアントをアンインストールする場合またはクライアントが **EPM System** サーバー製品と同じマシンにインストールされている場合、`DELETE_COMMON=false` コマンド・ライン・パラメータを使用してアンインストーラを起動します。[クライアントのサイレント・アンインストールの実行](#)を参照してください。

クライアント・インストーラの詳細は、*Oracle Enterprise Performance Management System* インストールガイドおよび構成ガイドの **EPM System** クライアントのインストールを参照してください。

### クライアントのサイレント・アンインストールの実行

**EPM System** クライアントをアンインストールするには、コマンド・ライン・パラメータ `/x` を指定して **EPM System** クライアント・インストーラを使用します。

**Oracle Essbase** クライアントまたは **Oracle Essbase Administration Services** コンソール以外の **EPM System** クライアントのサイレント・アンインストールを行うには、次のコマンドを使用します:

```
installer file name /x /s /v"/qn /l*v log file path and name "
```

たとえば、次のコマンドでは **Oracle Smart View for Office** がアンインストールされ、ログ `c:/temp/SilentInstall.log` が作成されます:

```
SmartView.exe /x /s /v"/qn /l*v c:/temp/SilentInstall.log"
```

**Essbase** クライアントまたは **Administration Services** コンソールのサイレント・アンインストールを行うには、次のコマンドを使用します:

```
installer file name /x /s /v"/qn DELETE_COMMON= value /l*v log file path and name "
```

`value` は、`true` または `false` です。

**Essbase** クライアントおよび **Administration Services** コンソールは、いくつかの共通コンポーネントを共有します。パラメータ `DELETE_COMMON=true` を使用すると、アンインストーラでこれらの共通コンポーネントが削除されます。複数のクライアントが同じマシンにインストールされるか、**EPM System** サーバー製品と同じマシンにクライアントがインストールされる場合、1つのクライアントのみを削除する場合は `DELETE_COMMON=false` を使用する必要があります。

## Smart View の拡張機能の削除

**Oracle Smart View for Office** は、次の **Oracle Enterprise Performance Management System** 製品のプロバイダ拡張機能をサポートしています:

- **Oracle Hyperion Financial Reporting**
- **Oracle Hyperion Planning** の予測プランニング拡張機能
- **Planning** のプランニング管理拡張機能

Smart View の拡張機能を削除する方法の詳細は、*Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド*を参照してください。

管理者の場合、拡張機能の管理の詳細は、*Oracle Smart View for Office ユーザーズ・ガイド*を参照してください。

# 8

## カスタム構成の実行

この章では、Oracle Enterprise Performance Management System デプロイメントに行うことができる追加のカスタム構成を説明します。

### ヒープ・サイズの変更によるパフォーマンスの最適化

環境によっては、Java Web アプリケーション・サーバーのヒープ・サイズを変更する必要があります。たとえば、WebLogic で OutOfMemory エラーが表示される場合、ヒープ・サイズを大きくします。WebLogic Server のメモリー要件を小さくする必要がある場合、ヒープ・サイズを減らします。

デフォルトでは、Java Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーにデプロイする場合、EPM System コンフィグレータは、マシンのメモリーに基づいて単一の管理対象サーバーのデフォルトのヒープ・サイズを設定します：

- 12GB 以上のマシンでは、ヒープ・サイズを 8GB に設定します
- 6GB 以上 12GB 未満のマシンでは、ヒープ・サイズを 4GB に設定します
- 6G 未満の 32 ビット・マシンでは、ヒープ・サイズを 750MB に設定します
- 6G 未満の 64 ビット・マシンでは、ヒープ・サイズを 1.536MB に設定します

#### ヒープ・サイズの変更

Windows レジストリ・エディタを使用して、Windows サービスのヒープ・サイズを変更します。Windows の管理対象サーバーのヒープ・サイズを変更するには：

1. 管理対象サーバーを変更する製品をホストしているマシンで、Windows レジストリ エディタを開きます：「**スタート**」、「**ファイル名を指定して実行**」を選択し、regedit と入力してから、「**OK**」をクリックします。
2. レジストリ エディタで「**HKEY\_LOCAL\_MACHINE**」、「**SOFTWARE**」、「**Hyperion Solutions**」、「ManagedServerName」、「WindowsServiceName\_InstanceName」の順に選択します。

たとえば、単一の管理対象サーバーをデプロイした場合、「**HKEY\_LOCAL\_MACHINE**」、「**SOFTWARE**」、「**Hyperion Solutions**」、「**EPMServer0**」、「**HyS9EPMServer\_InstanceName**」の順に選択します。

単一の管理対象サーバーをスケール・アウトした場合、スケールアウト・マシンで、「**HKEY\_LOCAL\_MACHINE**」、「**SOFTWARE**」、「**Hyperion Solutions**」、「**EPMServer1**」、「**HyS9EPMServer\_InstanceName**」の順に選択します。

たとえば、Oracle Hyperion Planning をデプロイした場合、「**HKEY\_LOCAL\_MACHINE**」、「**SOFTWARE**」、「**Hyperion Solutions**」、「**Planning0**」、「**HyS9Planning\_InstanceName**」の順に選択します。

デプロイメント内の管理対象サーバーの完全なリストが必要な場合、デプロイメント・レポートを実行します:

`EPM_ORACLE_INSTANCE/bin` に移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry report deployment
```

レポート・ファイル(`deployment_report_YYYYMMDD_HHMMSS.html`)は、`EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports` に格納されています。

3. 値が `-Xmx` で始まる「**JVMOptionX**」(X は 1、2、...)を右クリックし、「**修正**」を選択します。
4. 「**値のデータ**」で、値を環境に適した値に変更します。

```
-XmxValuem
```

たとえば、ヒープ・サイズを **8GB** に設定するには、次のように入力します:

```
-Xmx8000m
```

5. 「**OK**」をクリックします。
6. レジストリ・エディタを閉じます。
7. 「**スタート**」、「**すべてのプログラム**」、「**Oracle EPM System**」、「**Foundation Services**」、「**EPM System の起動**」の順に選択して、Oracle Enterprise Performance Management System を起動します。
8. デプロイメント内の各マシンで、管理対象サーバーごとにこれらのステップを完了します。

Linux マシンの場合、または Windows マシンの別の方法では、製品の起動スクリプトで管理対象サーバーのヒープ・サイズを変更します:

1. 管理対象サーバーを変更する製品をホストするマシンで、製品のカスタム起動スクリプトをテキスト・エディタで開きます:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/deploymentScripts/  
setCustomParamsManagedServerName.bat|.sh
```

たとえば、Oracle Hyperion Foundation Services 管理対象サーバーのヒープ・サイズを変更するには、`/bin/deploymentScripts/setCustomParamsFoundationServices.bat|.sh` を開きます。

2. 次のようなエントリを変更します:

```
set USER_MEM_ARGS=-Xms128m -XX:PermSize=64m -XX:MaxPermSize=256m -  
Xmx512m
```

`-XmxValuem` の値を、環境に適した値に編集します。

3. ファイルを保存します。

4. 変更後、製品のスクリプトを再実行します。
5. デプロイメント内の各マシンで、管理対象サーバーごとにこれらのステップを完了します。

### ヒープ・サイズの検証

ヒープ・サイズが正しく設定されていることを検証するには:

1. WebLogic 管理者資格証明を使用して、WebLogic 管理コンソールにログインします。  
(`http://WebLogic_Admin_Host:WebLogic_Admin_Port/console`、例:`http://FNDHOST1:7001/console`) (または、「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle WebLogic」、ユーザー・プロジェクト、EPMSysSystem、管理サーバー・コンソールを選択します。)
2. ドメイン構造で、「環境」を展開して、「サーバー」を選択します。
3. サーバーのサマリーで、「ManagedServerName」を選択します。
4. 「モニタリング」タブ、「パフォーマンス」タブの順にクリックします。
5. 「Java 仮想マシンのメモリー使用率の統計」で、「最大ヒープ・サイズ」設定を確認します。

## Essbase 構成のカスタマイズ

この項では、必要に応じて Oracle Essbase で使用する追加の構成設定について説明します。

### クライアントによるクラスタ名を使用した検索の有効化

Essbase クライアントは、`http(s)://host:port/essbase/agent?ClusterName=clusterName` という形式の URL を使用して Essbase クラスタに接続できます。ログインを簡略化するには、Essbase クライアントは URL ではなくクラスタ名を直接使用できます。

### Essbase で使用する JRE の特定のインストールの指定

Essbase で JRE の特定のインストールを使用するよう指定するには、`essbase.cfg` の `JVMODULELOCATION` 設定を更新します。

`ARBORPATH/bin` にある `essbase.cfg` ファイルで `JVMODULELOCATION` を設定すると、Essbase と使用するために JRE インストールを詳細に指定できます。この設定は、データ・マイニング、Oracle Hyperion Shared Services、カスタム定義関数、トリガー、および外部認証を使用可能にする場合に必要です。

この設定は、Essbase サーバー・コンピュータ上に複数のバージョンの Java がインストールされている場合に特に有効です。

Essbase サーバーの構成時に、`JVMODULELOCATION` の正しい設定が `essbase.cfg` に自動的に追加されます。

`JVMODULELOCATION` パラメータを変更するには、Java 仮想マシン (JVM) ライブラリのフル・パスおよびファイル名を指定する必要があります。ライブラリの場所および名前は、使用しているオペレーティング・システムによって異なります。EPM System インストーラは、JRE を `/1.8.0_181/jre` にインストールします。

 ノート:

64 ビット・オペレーティング・システムで 64 ビット Essbase を実行するには、64 ビット JVM が必要です。

### JvmModuleLocation を使用したメモリの管理

データ・マイニング、Shared Services、カスタム定義関数、トリガーまたは外部認証を使用しない場合、使用するメモリの量を減らすには、`essbase.cfg` を編集し、`JvmModuleLocation` を NULL(空)に設定します。

これらの機能を使用し、使用するメモリの量を減らす必要がある場合は、次の環境変数を設定すると JVM ヒープ・サイズを減らせます:

```
ESS_JVM_OPTION1=-Xmx16m
```

JVM ヒープ・サイズのデフォルトの最小値および最大値はプラットフォームとバージョンによって異なるので、使用している環境に適した値を設定してください。

# 9

## 障害リカバリ

### 次も参照:

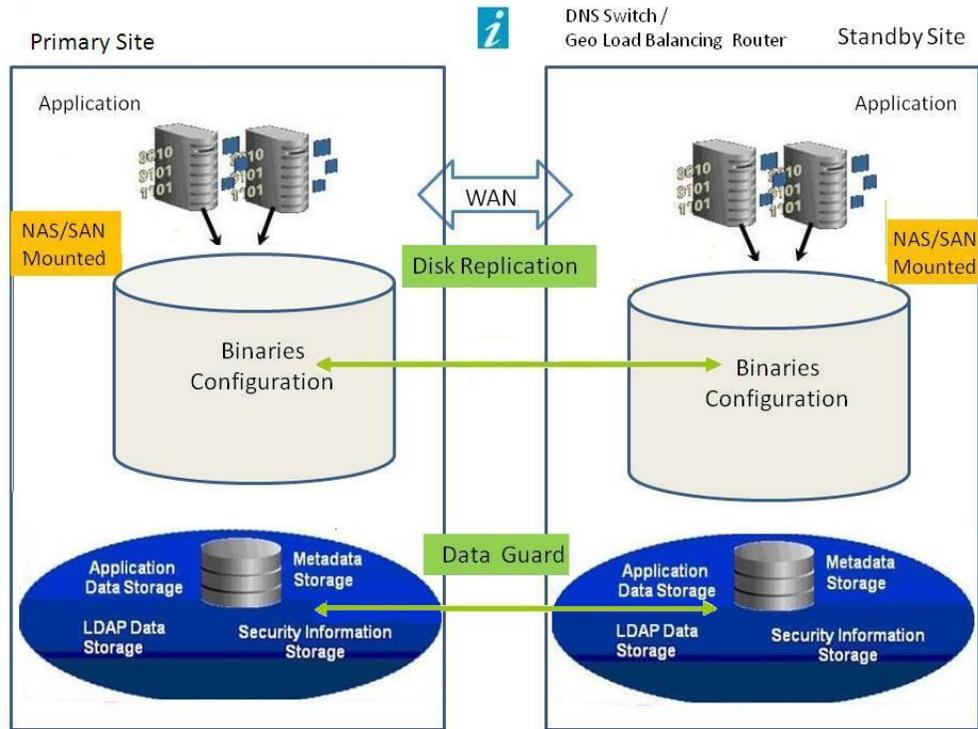
- [障害リカバリについての一般情報](#)
- [障害リカバリのアーキテクチャ](#)
- [EPM System コンポーネントの障害リカバリ](#)
- [ファイル・システムおよびデータベースの複製を使用しない障害リカバリ](#)
- [追加情報](#)

## 障害リカバリについての一般情報

この章には、Oracle Enterprise Performance Management System の障害リカバリ構成に固有の情報が記載されています。*Oracle Fusion Middleware デザスタ・リカバリ・ガイド*([http://download.oracle.com/docs/cd/E14571\\_01/doc.1111/e15250/toc.htm](http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e15250/toc.htm))は、Oracle Fusion Middleware の障害リカバリ・ソリューションをデプロイして管理するために必要な設計の考慮事項、推奨事項、設定の手順、トラブルシューティングのステップおよびその他の情報の中心的なリファレンスとなります。

## 障害リカバリのアーキテクチャ

図 9-1 EPM System の障害リカバリのアーキテクチャ



### ノート:

図 1 に示されているデプロイメントでは対称トポロジ(本番サイトおよびスタンバイ・サイトに同数のサーバーが存在する)を使用していますが、非対称トポロジ(スタンバイ・サイトには本番サイトよりも少数のサーバーが存在する)も使用できます。非対称トポロジを使用したデプロイメントでは、本番サイトのロジカル・サーバー・クラスごとにスタンバイ・サイトのサーバーを必要とします。

共有または複製されたディスクを使用するには、すべてのマシンで共通の共有が必要です。たとえば、共有は/user\_projects/dataの下にすることができます。

## EPM System コンポーネントの障害リカバリ

### 環境の構成

障害リカバリ用の環境を構成するには、次のステップを実行する必要があります:

1. 本番サイトで **Oracle Enterprise Performance Management System** をインストールして構成します。  
ランタイム実行ファイルおよびデータは、複製可能なパーティション上に置く必要があります。  
論理サービスを形成するために、分散されたサービスをクラスタ化する必要があります。
2. スタンバイ・サイトのホスト名が本番サイトのホスト名と異なる場合、スタンバイ・サイトにホスト名の別名を設定します。 [ホスト名の要件](#) を参照してください。
3. 本番サイトでの **EPM System** の構成が完了したら、スタンバイ・サイトに **EPM System** をインストールして構成します。
4. **Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition** を使用している場合は、プライマリ環境から **EPM System Web** アプリケーションが構成されているすべてのセカンダリ・ノードに次のファイルをコピーします:
  - <DOMAIN\_HOME>\config\fmwconfig\keystores.xml
  - <DOMAIN\_HOME>\config\fmwconfig\cwallet.sso
  - <DOMAIN\_HOME>\config\fmwconfig\bootstrap\cwallet.sso
5. データベースの複製を設定します。

#### ノート:

複製にはバックアップおよび復元手順を使用できます。

6. スタンバイ・サイトを使用可能にします。
  - 本番サイトおよびスタンバイ・サイト間のミラーリングを無効化します。
  - アプリケーションごとにクラッシュ・リカバリ手順を実行し、**Oracle Essbase** を回復します。 *Oracle Enterprise Performance Management System* バックアップおよびリカバリ・ガイドの第4章の **Essbase** コンポーネントを参照してください。
  - スタンバイ・ホストのサービスを起動します。

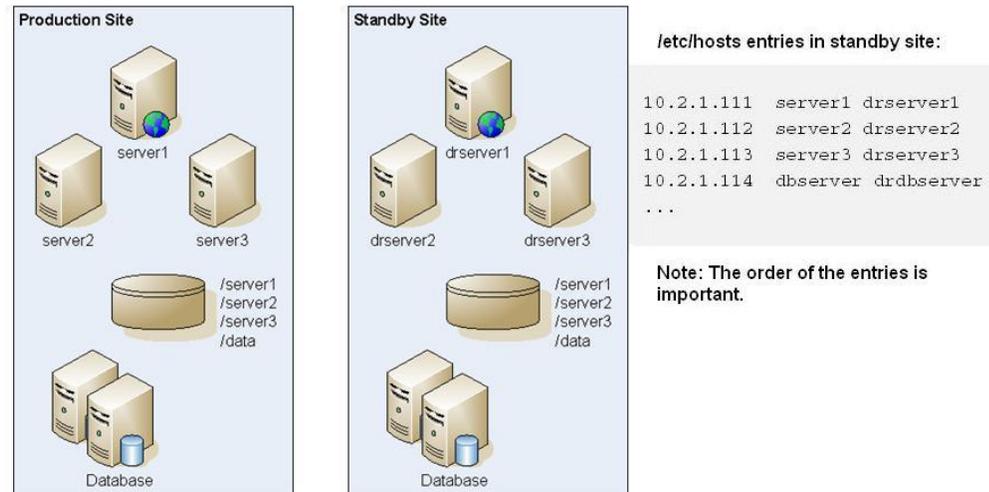
#### ホスト名の要件

**EPM System** 障害リカバリのデプロイメントには、本番サイトとスタンバイ・サイトでホストの参照を解決する手段が必要です。以下のオプション(推奨する順に記載)のいずれかを構成で使用してください:

- 本番サイトおよびスタンバイ・サイトが別々のネットワーク上にあります。  
完全修飾ホスト名は両方のサイトで同じにできます。
- 本番サイトおよびスタンバイ・サイトは異なる **DNS** を持ち、ホスト名をネットワーク上の正しい **IP** アドレスに解決できます。  
スタンバイ・サイトには、障害の発生時にアクティブ化されるスタンバイ **DNS** を使用できます。
- 本番ホスト名は/etc/hosts ファイルによってスタンバイ・サイトのローカル **IP** アドレスに解決されます。

本番サイトとスタンバイ・サイトでホスト名が異なり、スタンバイ・サイトに個別のDNSがない場合、次に示すとおり、メインのサーバーが別名の中で最初のエントリとなるように、スタンバイ・サイトに本番サイトのサーバーの別名を設定します。

図 9-2 ホスト名の別名の設定



### データベースの推奨事項

障害リカバリ環境におけるデータベースの推奨事項:

- スタンバイ・サイトのデータベース・ホスト名別名を使用します。
- データ・リポジトリに Oracle Data Guard 構成を使用します。
- 計画的な構成の変更時には、Oracle Data Guard とデータベースの同期化を強制します。

## ファイル・システムおよびデータベースの複製を使用しない障害リカバリ

ファイル・システムとデータベースの複製ではなく、バックアップを使用して障害リカバリを設定できます。複製を使用すると、本番サイトに加えられたすべての変更は、スタンバイ・サイトにも適用されます。バックアップは複製よりは低コストですが、復元可能なのはバックアップしたデータのみです。たとえば、金曜日にデータがバックアップされて、翌週木曜日に本番サイトで障害が発生すると、その間に発生したデータの変更は失われます。バックアップをより頻繁に行うと、より多くのデータを復元できます。

ファイル・システムのバックアップとデータベースのバックアップは、同期化されている必要があります。アクティビティが比較的小さいときにファイル・システムとデータベースをほぼ同じ頃にバックアップすると、両者の同期が確実になります。

ファイル・システムやデータベースの複製を使用しない障害リカバリでは、次のステップのいずれかを使用します:

- インストール・イメージを複製し、本番サイトに初期設定後に適用されたすべてのパッチがスタンバイ・サイトにも確実に適用されるようにします。
- 本番サイトのすべてのパッチを手動で即座にスタンバイ・サイトに手動で適用します。

## 追加情報

障害リカバリ環境の設定の詳細は、次のドキュメントを参照してください:

- *Oracle Fusion Middleware ディザスタ・リカバリ・ガイド*([http://download.oracle.com/docs/cd/E14571\\_01/doc.1111/e15250/intro.htm#BABHCEJJ](http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/doc.1111/e15250/intro.htm#BABHCEJJ))
- 使用する RDBMS の障害リカバリのガイド。